インスリノーマの1例を報告した.

16. 大量出血をきたした十二指腸憩室症の1例

（第二病院外科）
○三浦　一浩・成高　義彦・大石　俊典・小川　智子・若林　敏弘・小豆畑　博・大谷　洋一・菊池　友允・小川　健治・梶原　哲郎
（第二病院中央検査科）　藤林真理子

十二指腸憩室症は臨床上しばしば遭遇される疾患であるが，大量出血を来すことは稀である．最近，我々は大量出血を来した十二指腸憩室症の1例を経験した．

症例は45歳の女性，昭和63年9月1日下血の精査目的にて当科入院．各種画像診断では十二指腸の第3部に2個の憩室を認めるほか病変はなかった．新たな出血もないため，経過観察としたが，9月23日再び吐下血のため再入院．緊急内視鏡で憩室に鮮血および凝血塊を認め，血管造影でも同部に造影剤の漏出を認めたため，憩室出血と診断し，緊急手術を施行した．出血部位は病理検査にて憩室と考えられた．非常に稀な憩室症大量出血の1例を経験したので文献的考察を加え報告する．

17. 若年者ガストリノーマに対し全胃幽門輪温存膵頭十二指腸切除術を施行した1例

（消化器外科）
○小形　滋彦・羽生富士夫・今泉　俊秀・三浦　修・中迫　利明・長谷川正治・吉井　克巳・中上　哲雄・小林　中・井上　雄志・桂川　秀雄
（消化器内科）渡辺伸一郎

症例は15歳男性，13歳時には十二指腸潰瘍を契機として膵頭部ガストリノーマを発見された．潰瘍に対してはオメプラゾールが奏功したが，腫瘍の増大（2cm →3cm）を認め，手術を施行した．転移巣のないことが術前の画像診断，術中超音波検査，選択的動脈内セクレチン負荷試験で確認されたこと，抗潰瘍薬によく反応することを以て，術後の消化管吸収能を考慮して敢て全胃を温存した．術後血中ガストリンは正常に帰し，体重も増加し良好な経過をたどっておりかかる術式は膵頭部に限局し，核出術の不可能なガストリノーマに対して積極的に試みるべき術式と考えられる．

18. 肝硬変合併妊娠の1例

（産婦人科）
○山口　裕子・村岡　光恵・武田　佳彦
（母子総合医療センター母性）
岩下　光利・中林　正雄・坂元　正一
（同　新生児）三室　卓久・仁志田博司
（消化器病センター外科）矢川　彰治
（同　内科）久満　薫樹

肝硬変合併妊娠は頻度も少なく，報告例も極めて少ない．特に食道静脈瘤を伴った肝硬変合併妊娠の母児の予後は非常に悪く，出血を伴えば母児共に救命は，困難となる．われわれは妊娠経過中，慢性肝炎から食道静脈瘤をともなった肝硬変へ移行したにもかかわらず母児共に予後良好であった症例を経験したので報告する．症例は，25歳初妊婦．過去に計2回の輸血歴がある．22歳軽度肝機能障害を認めnonA nonB型慢性肝炎と診断される．昭和62年11月1日を最終月経として妊娠．妊娠22週，肝機能悪化し精査目的で入院．妊娠24週食道静脈瘤合併肝硬変と診断される．以後，安静，肝庇護，栄養確保につとめ循環血液量の増加による食道静脈瘤の破裂を危具しながら待機するも妊娠30週肝機能悪化，胎児仮死徴候出現したため妊娠継続危険と判断．帝王切開術施行し男児1,410g生産す．術後黄疸増強するも，新鮮凍結血漿・G-I療法にて徐々に軽快，術後19日目退院す．

19. 両眼に原因不明の嚢胞様黄斑浮腫を来した1症例

（第2病院眼科）○小篭　弘子・宮永　嘉隆

嚢胞様黄斑浮腫（CME）は一般に白内障手術後発生するものであるが，今回20歳女性で長期にわたり嚢胞様黄斑浮腫を認め，原因不明の症例に，プレドニン大量療法を行い，軽快した1例を経験したので報告する．

20. 反復する外眼筋麻痺を呈した1例

（脳神経センター神経内科）
○菊地美由起・竹内　恵・麦島　真理・亀井　英一・内山真一郎・小林　逸郎・竹宮　敏子・丸山　勝一